Ⅶ. 緊急時の対応

１．緊急事態を一刻も早く伝える

不幸にして事故に遭ったら、まずは、緊急事態を他の人に伝え、救助や応援を頼むことです。「一人で作業は行うな」とか「作業をしている場所を家族に伝えておく」と言われますが、農作業の多くは一人作業が中心であり、まして作業現場を家族などに伝えてあっても、緊急事態が起きたかは本人からの通報が無ければわかりません。

緊急連絡をする上で欠かせないのが、携帯電話の携帯です。農作業時の携帯電話の携帯三原則は表のとおりです。

また、広い農地や中山間地では、場所がよく分かりません。救急車が右往左往しないよう、日頃から作業場所の目印や、道路の方向、曲がり角の確認をしておくことが大切です。

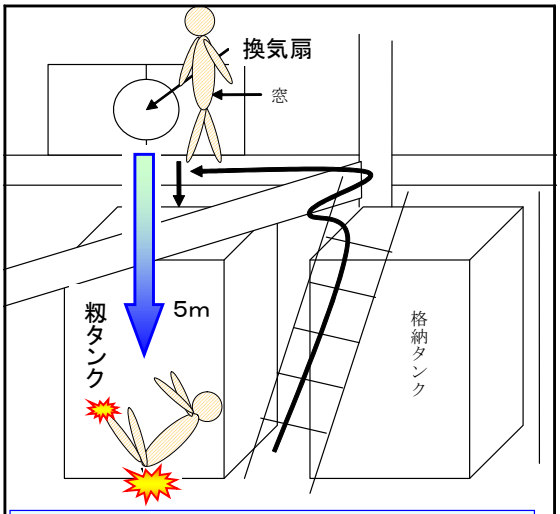
携帯電話の携帯を
－携帯電話の携帯3原則－

①どんなに近くても携帯を、
　＊緊急時は突然やってくる
②携帯が、体から飛び出さないように
③高齢者も、必ず携帯を

農作業の必需品「携帯電話」、作業地の目印確認

（１）どんなに近くでも携帯電話の携帯を

右の事例では、家のすぐ隣りの乾燥施設で、乾燥機から籾タンクに籾を移す際、換気扇のスイッチを入れるため、壁を伝い昇りしていて、足を踏み外し、５ｍ下の籾タンクに落下、足と腰の骨を骨折。大声で助けを呼んだがだれも答えず。焦っていて、ふと胸を触ると携帯電話があった。この方は、日頃、携帯電話を持ち歩かない人。たまたま、この日は、村の人からの連絡が入るので持っていた。家に電話、救急車、レスキュー隊が来てくれ、滑車で吊り上げ、救出。



家の横の乾燥施設で、乾燥機から籾タンクに籾を移す作業中、換気扇のスイッチを入れるため、壁を伝い昇りして、5m深さのタンクに落下。踵骨骨折、腰椎圧迫骨折。大声で助けを呼ぶも、誰も気がついてくれない。ふと胸を触ると、携帯電話が…。

家を一歩出る時、「携帯電話」確認！
なければ取りに戻る！

（２）携帯電話が体から飛び出さないように

右の事例は、ミカン畑のモノレールが逆走し、投げ出された衝撃で携帯電話が草むらに飛び込み、連絡取れず。よろよろ歩き出したとき、たまたま奥さんから電話がかかり、呼び出し音が聞こえ、草むらの中の電話の位置がわかり連絡が取れた事例です。

また、別の事例では、トラクターもろとも崖から転落し、やはり携帯電話が飛び出してしまいました。たまたま、近くの道路に落ちていて事なきを得ました。

レールに挟まった小枝を抜いた瞬間、モノレールが逆走、約20m先で投げ出され地面に叩きつけられ、その衝撃で、携帯電話が草むらに飛ばされ見当たらず。腰椎圧迫骨折。その時、たまたま奥さんから電話がかかり、連絡が取れた。

農作業時は、マナーモードは解除

（３）高齢者も、携帯電話の携帯を

右の事例は長野で２月の寒い朝９時頃、78歳の女性が、家から500m離れたハウスの菊に水をやるため、用水の法面を水くみに降りようとして残雪で足を滑らせ、転んだ際に、大腿骨頸部骨折。法面を上がることができず、一旦用水路に降りて、少しでも傾斜の少ないところに移動しようとしたが、そのまま用水に浸かって動けなくなった事例です。

冬、ハウスの菊用の水を、わずか1cmの水深のU字溝から取ろうと、降りていく途中、地面が凍っていて、2m滑った、バッキッと音がした。大腿骨頸部骨折

約20分後、たまたま散歩していた人が発見、数人がかりで助け出されたました。

もし、発見されていないと重大な事態になっていた可能性があります。

また、リンゴ園で87歳の女性が脚立から落ち、左踵骨骨折。50～60m先の家まで這って行き、家の電話で別のリンゴ園で働いていた家人に連絡を取り、病院に搬送されたという事例もあります。。

「高齢者だから携帯電話なんか必要ない」
ではなく、高齢者こそ持つべき
＊携帯電話は、杖やメガネと同じ

２．事故時の対応、これだけは

止血などの応急処置の仕方や人工呼吸の仕方など、一般的な応急処置は、成書に譲るとして、今回の農作業事故の対面調査で、とくに「これだけは知っておいて欲しい」ことについて紹介します。

（１）切断した指は、ラップに指を包んで氷で冷やす

泥で汚れているからと、指を洗ったり、また直接氷に漬けたりしない。最終的な搬送先は指の接合術（マイクロサージャリー）ができる病院へ搬送します。

＊マイクロサージャリー：顕微鏡下で直径0.3㎜の神経や　　血管を接合する。

なお、阻血（血が流れなくなった、少なくなった状態）で、温阻血で6～8時間以内、また、冷保存（0～4℃）では12～24時間以内であれば、接合できる可能性が高い。

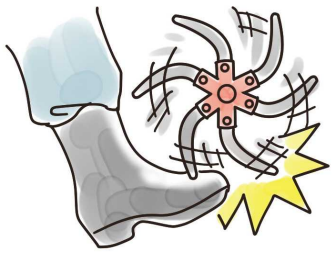
１．指を切断した場合

・ラップ等に切断した指を包んで、氷に漬けて医療機関に運ぶ
　＊**直接、氷につけない**
　　洗わない

最終的な搬送先は、指の接合術（マイクロサージャリー）ができる医療機関へ

切断した指を直接氷に浸けない

（２）耕運機の刃が足に刺さった場合、刃は抜かない



刃を自分で足から抜いたりせず、周りをタオルなどで包む。刃を抜くと、足の中を走っている血管を傷つけ、大出血を起こすことがあります。

２．耕耘機等の刃が足にくい込んだ場合

・刃は、足につけたままに
＊**下手に抜くと、血管を傷つけ、大出血**
　農機の専門家（農協など・ﾚｽｷｭｰ）を呼ぶ⇒刃を耕耘機から外してもらう

農協の農機の専門家やレスキュー隊等に耕耘機から刃を外してもらうか、切ってもらったりして、刃は足につけたまま、病院に搬送してもらうことです。

足に食い込んだ刃をつけたまま、搬送

（３）蜂に刺された時

今まで何度も蜂に刺されたが、単に痛いだけだと油断してはいけません。蜂の種類が変わったりして、突然アナフィラキシーショックになり、呼吸困難となることがあります。

＊今までアナフィラキキシーショックになった人は、医療機関でエピペン（アナフィラキシーショックに備えた自己注射）を処方してもらい、常に携帯し、万が一に備えることも必要です。

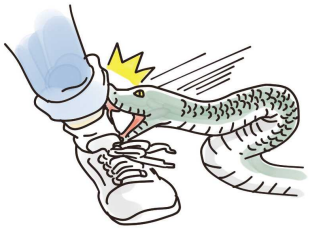
エピペン：しばし症状を軽減・一度刺された人は携帯を。治療薬ではない

3．蜂に襲われたとき

・今まで大丈夫、
　今回も大丈夫とは限らない
　＊蜂の種類が変われば、
　　突然アナフラキシーにも
　　（エピペンの処方）

痛かっただけの蜂刺されが、突然、アナフラキシーに変身も

（４）毒蛇に噛まれた時



本土では、ほとんどマムシが多いのですが、時にはヤマカガシの場合もあります。医療機関への情報として、蛇の種類や特徴を伝えることが大切です。とくにヤマカガシに咬まれた場合はほとんど痛みを感じませんが治療が必要です。

ハブの場合は、とにかく一刻を争って医療期間へ搬送することが重要です。

4．毒蛇に咬まれた

・咬まれた部位の上部を圧迫
・刺創から血を出す
　＊口内炎など口の中に傷のある場合は要注意
・すぐに医療機関へ、ワクチン投与
　＊蛇の種類が分かれば確認のこと

咬まれた蛇の種類は確認、毒の吸い出し、口の中の傷に注意

（５）汚れた土壌・植物での刺し傷、切り傷

農作業をしていて釘やトゲが刺さった、あるいは切り傷を負うことなどは日常茶飯事です。

しかし、破傷風の危険性もありますので、手前勝手に「大丈夫」と判断しないことが大切です。医療機関では、破傷風の可能性も考えての対処療法をされます。医療機関への積極的な受診が大切です。

5. 刺し傷、切り傷

・破傷風の可能性
「これくらい、百姓にはいつもあること」と手前勝ってな判断をしない

また、稲の葉で目を突いたなど、少し我慢すればと放置すると大変です。特に、植物の葉での目の傷は、細菌の繁殖や傷の形状により大変治りにくく、必ず治療が必要です。

「これくらい」と放置が、重篤な症状に

（６）熱中症

早朝、約30分庭の水遣りをしていて熱中症になった事例があります。その方は、その日以前にかなり暑い状態に置かれていました。発症日だけでなく、それ以前の日常的な暑さ対策が重要です。

その事例以外でも、発症当日は極端に暑くなくても、以前からの仕事がハードでそのことが誘因となつた事例が多くあります。暑いときの日頃の体調管理が最も大切です。

6. 熱中症

・気温が高い時だけでなく、
気温が高くなる時が要注意
＊水分補給、暑さ対策
・「発症日以前」の体調管理
＊意識障害があれば救急隊要請

また、本当に暑いときはもちろんですが、暑くなり出すとき、また一旦涼しくなり、次に暑くなる時に熱中症が多発しています。体が暑さに慣れていないために、ダメージが大きくなるとも考えられます。

とにかく、脱水が要因となるので水分補給を心がける、意識障害あればちゅうちょすることなく救急車要請が必要です。

「水筒忘れた、まっいいか」ではなく
水筒を取りに戻ろう！

３．留意点

（１）血液サラサラ薬を服用している場合

最近、血液サラサラ薬を処方され服用されている方も多くなっています。

この場合、ちょっとした切り傷でもなかなか出血が止まりません。しっかり圧迫止血が必要です。

また、打撲して内出血した場合も、いつまでも内出血が続く恐れがあります。特に、体をぶつけた場合、「これくらい我慢しないと」と我慢してはいけません。内出血が止まらず臓器を圧迫し、重篤な症状に陥る可能性があります。

血液サラサラ薬の服用

・怪我の時、長時間血が止まらない
　＊止血をしっかり
・打撲による内出血
　＊特に内臓における出血は、内臓を圧迫し重篤に

事例では、血液サラサラ薬を飲んでいる方が、刈払機を使用中、切り株に刃が当たり反動で背中を強打し、内臓出血が止まらず、救急搬送。また、トラクターから転落、背中を強打。半日我慢して作業を続けていて、内臓出血止まらず、緊急入院、等の事例があります。

（２）頭部の打撲・外傷

頭を強打し、直後の病院での頭の検査では「異常なし」と言われたが、その後、ジワジワと出血して、数ヶ月後に症状が出る、という事例はまれではありません。

右の事例は、ロールベーラーを乗せてロープで縛った時、ロープが切れて転倒して頭を強打。直後に脳外科を受診して「異常なし」でしたが、３ヵ月後に症状が出てきた事例です。

打撲の影響でジワジワと出血し慢性硬膜下血腫となりました。病院では、頭部を打った時、その後「定期的に診察を」と指示されますが、症状がないのでついつい放置して、悪化することがよくあります。必ず指示に従ってください。

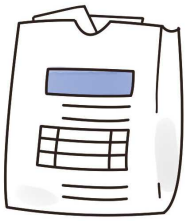
頭部の外傷・打撲

・硬膜下出血の可能性あり
　数ヶ月後に症状がでることがあり
　＊事故直後、「異常なし」でも長期間の観察が必要

トラックに積んだﾛｰﾙﾍﾞｰﾗｰをﾛｰﾌﾟで締めたとき、ﾛｰﾌﾟが切れて、頭部を強打。当日、脳外科受診するも異常なし、3カ月後慢性硬膜下出血

打撲、あなどるなかれ

（３）服薬中の薬の注意をしっかり守る



高血圧、糖尿病、循環器疾患などの治療等で多くの薬を飲んでいる方もまれではありません。それぞれの薬の注意書きをもう一度、確認して、守ってください。

服薬中の薬は？

・薬の注意書きを読む、守る！
＊服用後、眠くなる薬等々

「服薬後眠くなる」などの薬もあり、事故に直結する場合もあります。

また、胃や婦人科の手術をした人は骨密度が低下している可能性があります。重量物の運搬などに特に注意が必要です。

ここでは、一般的な応急処置とは別に、とくに農作業事故現場での応急処置で「これだけは」という事項を取り上げました。そして、その際の留意点としてまとめました。

もちろん、自分や周りの人ができる応急処置がある程度されていると、予後がずいぶんと変わります。機会があれば、ぜひ一般的な止血、人工呼吸、ＡＥＤの使い方の研修を受けていただきたいと思います。